

二〇二五年度

# 日本近世文学会春季大会

大会プログラム

研究発表要旨

期日 六月十四日（土）・十五日（日）・十六日（月）

会場 立教大学池袋キャンパス

〒171-8501 東京都豊島区西池袋三―三四―一

# 日本近世文学会春季大会のご案内

会員の皆様にはますますご清栄のことと存じます。  
二〇二五年度春季大会を開催いたしますので、ご案内申し上げます。  
左記の案内をご確認いただき、お申し込み下さい。

## 記

### ◆参加の手続き

- ・参加の申し込みと参加費・懇親会費の支払いは、Peatix または郵便振替をご利用ください。

【Peatixでの申し込み・支払い】

URL または QR コードからアクセスしてください。

URL <https://2025-spring.peatix.com>

【郵便振替での申し込み・支払い】

郵便局備え付けの振替用紙に金額の内訳を明記してお支払いください。

振替番号・加入者名   〇〇一六〇一一一〇二八一三   日本近世文学会

- ・参加費は一五〇〇円、懇親会費は一般七〇〇円（大学院生・学部生三〇〇円）です。
- ・申し込みと支払いの締切は五月二十三日です。Peatixでの申し込みは同日十三時締切です。

### ◆領収書・出張依頼状

- ・学会印の入った領収書が必要な方は、学会事務局へご連絡ください。Peatixをご利用の場合、システム上で領収書の発行が可能です。
- ・出張依頼状が必要な方は、氏名・職名・提出先・出張期間を明記し、学会事務局へご連絡ください。



◆大会当日について

- ・対面形式で開催します。オンライン中継はありません。
- ・会場受付で資料集をお渡しします。不参加の方への資料集の郵送はいたしません。
- ・会場受付で託児料金補助申請書を配付します。必要な方はお受け取りください。
- ・大会二日目の昼食の用意はありません。
- ・大会三日目の文学実地踏査は、会場にて資料を配付しますので、各自・各グループでお回りください。

日本近世文学会春季大会会場校代表

水谷 隆 之（立教大学）

メールアドレス [fmiz@rikkyo.ac.jp](mailto:fmiz@rikkyo.ac.jp)

日本近世文学会春季大会実行組織

稲葉 有 祐（和光大学）

高松 亮 太（東洋大学）

丹羽 みさと（武蔵大学）

光延 真哉（東京女子大学）

吉丸 雄哉（二松学舎大学）

日本近世文学会事務局代表

佐藤 至 子

〒113-0033 東京都文京区本郷七-3-11

東京大学文学部国文学研究室内

メールアドレス [info@kinseibungakukai.com](mailto:info@kinseibungakukai.com)

# 大会プログラム

【会場】 立教大学池袋キャンパス

## 【行事】

第一日 六月十四日（土）

委員会 （二・〇〇～一四・〇〇）

委員会会場 十号館一階一〇三教室

大会受付 （三・三〇）

開 会 （四・二〇）

講 演 （四・三〇～一五・三〇）

講演会場 九号館二階大教室

三遊亭円朝没後百二十五年によせて

東京大学名誉教授

延 広 真 治

日本近世文学会賞授賞式・総会（一六・〇〇～一七・三〇）

懇 親 会 （一八・〇〇～二〇・〇〇）

懇親会会場 第一食堂

第二日 六月十五日(日)

大会 受付 (二〇・〇〇)

研究発表会 (二〇・三〇〇～二一・五〇〇)

研究発表会会場 九号館二階大教室

- 1 井上通女の紀行文『東海紀行』の問題点と刊行の経緯
- 2 広瀬淡窓の長篇古詩「酔後戯題」について

京都産業大学  
早稲田大学

雲岡梓  
池澤一郎

昼 休 み (一一・五〇〇～一三・三〇〇)

編集委員会会場 七号館二階七二〇一教室

研究発表会 (一三・三〇〇～一五・四〇〇)

研究発表会会場 九号館二階大教室

- 3 元禄一年の出版禁令と『弁惑指南』論争
- 4 読本『南朝外史武勇伝』の素材と創作手法
- 5 四世鶴屋南北作歌舞伎『桜姫東文章』の江島児ヶ淵伝説

大阪大谷大学  
昭和女子大学  
国文学研究資料館名誉教授

木村迪子  
萩原大地  
高橋則子

閉 会 (一六・〇〇)

第三日 六月十六日(月)

文学実地踏査 会場にて資料を配付します。

## 研究発表要旨

### 井上通女の紀行文『東海紀行』の問題点と刊行の経緯

京都産業大学 雲 岡 梓

井上通女は丸亀から江戸に向かう際の紀行文『東海紀行』と帰る際の紀行文『帰家日記』の作者として知られる。特に『東海紀行』は、通行手形の不備で新居関所の通過を許されず、手形の再発行に至った経緯の記述が関所研究・交通史研究・女性史研究の観点から注目されている。しかし体系的な通女研究は行われておらず、『東海紀行』にも問題点・不明点が多い。

正徳五年、通女は貝原益軒の紹介で京の書肆柳枝軒を版元として『帰家日記』を刊行し、好評を得た。その二年後、荷田春満門下の学者、山名政胤が通女と柳枝軒に断りなく、流布本を用いて書肆山形屋善兵衛のもとから『東海紀行』の刊行を計画した。板木作成の段階で柳枝軒は版權を主張し、『東海紀行』は山形屋善兵衛と柳枝軒の相板として刊行に至った。その経緯は通女の歌文集『秋のともし火』や、現存する『東海紀行』板木の入木痕から知られる。

そうしてできた版本『東海紀行』には、文章・日付の脱落や、江戸に向かった際の通女の年齢の誤記があり、その誤りは関所

研究・交通史研究の分野にも影響を及ぼしている。家族に見せるために書かれた『東海紀行』と、広く公開することを前提に書かれた『帰家日記』という性質の違う二作を前後篇とする版本が提示した見解も、現代に引き継がれている。

以上のように、通女の体系的な研究の第一歩として、『東海紀行』刊行の経緯と刊行後の影響を整理する。

### 広瀬淡窓の長篇古詩「酔後戯題」について

早稲田大学 池澤 一郎

日田の漢詩人広瀬淡窓が、文政十年丁亥秋に詠じた「酔後戯題」は、全三十二句から成る長篇の七言古詩である。淡窓の随筆『懷舊樓筆記』巻三十では「十八才子ノ詩」と呼ばれ、淡窓の経営する咸宜園の門弟十八名の月旦を詩で詠じたものだ。

本発表では、本詩が『古詩韻範』（文化九年刊）に説明される古詩の換韻方法を遵守しつつ、極めて緻密な論理的構造を備えており、酒の飲めない淡窓が「酔後」に「戯」れに作れる作品でないことを論じる。その上で、何故に淡窓はそのような韜晦をしたかを考える。『懷舊樓筆記』に散在する弟子達の論評は、一人で四句、一人で三句、二句で二人、一句で一人、一句で二人と、その人の優秀さと淡窓との親疎に応じて長短種々であり、評語も一字から二十八字まで多様整然としている。

就中注目されるのが、最長の四句を費やす石門徳令である。徳令は僧門の出身であるが、在塾中は、仏教を放棄して、儒教を遵奉し、実父の命を奉じて淡窓を父のごとく敬い、淡窓重篤の折には食を絶つて身代わりになろうとする異色の弟子で、淡窓から疎まれると天を仰いで出奔する程だが、淡窓は別の門弟の言を借りて、徳令を弟子中の最高位に据えた。真面目過ぎる弟子が却つて師匠から疎まれる複雑な心理が緊密な構成の中に盛り込まれた、人間観、教育観の呈示される詩歌なのである。

## 元禄一一年の出版禁令と『弁惑指南』論争

大阪大谷大学 木村 迪子

元禄一一年（二六九八）一〇月、大坂の池田屋三郎右衛門方の『弁々惑指南』を小嶋勘右衛門ら三書肆が重板したとして、池田屋が大坂町奉行所に訴える一件が起こった。翌月、奉行所は大坂の全書肆を集めて重板類板の禁止を言い渡す。日本出版史上はじめて公に板権が認められたと言われる一件である。

しかし、渦中の一書『弁々惑指南』が、真言律の浄厳が著した『弁惑指南』の反論書として、曹洞宗僧の玄光によって著された仏書であることや、『弁々惑指南』板行後、浄厳の弟子である肥前の普寧が『群疑評釈集』を出版して反論したのを皮切りに、以後両陣営から多くの反論書が出版され、一大宗論に発

展したことは従来注目されず、『弁惑指南』論争を扱う宗学でも、『弁々惑指南』が元禄一一年の出版禁令に関与したことに着目する論考は認めがたい。

本発表では、今一度、『弁惑指南』論争と元禄一一年の出版禁令の周辺調査を行い、同列に並べてこれらを再検討する。現在『弁惑指南』論争とされるものの大半が実際には訴訟直後の元禄一二年以降に開始されていること、中でも元禄一二年六月板行の『弁々惑通衡』は敗訴した小嶋勘右衛門による出版であることを明らかにし、大坂の書肆らの影響力を強く受けて『弁惑指南』論争が行われた可能性を指摘する。

## 読本『南朝外史武勇伝』の素材と創作手法

昭和女子大学 荻原 大地

かつて、横山邦治氏は読本『南朝外史武勇伝』（榎亭主人編述、安政四年く文久年間に刊行）の素材として、実録『慶安太平記』の存在を挙げた。しかし、両作品を読み比べてみると、登場人物の名前や物語展開などに不一致が見られ、『慶安太平記』だけが作品の素材であるとは考えにくい。

本発表では、『南朝外史武勇伝』の素材として、新たに由井正雪物実録『望遠雑録』の存在を指摘し、本作が『慶安太平記』と『望遠雑録』を取り合わせ、そこに登場人物の前歴に関わる

物語を新たに増補した作品であると示す。

その上で、『南朝外史武勇伝』の内容の多くは新たに増補された物語で占められること、その内容はいずれも正雪のもとに集う登場人物の前歴を語る内容であること、作品全体に因果応報、勧善懲悪、読本的枠組みといった読本らしさが希薄であることを指摘し、『南朝外史武勇伝』は「実録種読本」というよりも、むしろ「読本風実録」と呼ぶにふさわしい特質を持つ作品であると明らかにする。

この「読本風実録」という位置づけによって、『南朝外史武勇伝』は「実録種読本」とは異なつた実録と読本の相互関係を示す作品と評価できると考える。

## 四世鶴屋南北作歌舞伎『桜姫東文章』の江島児ヶ淵伝説

国文学研究資料館名誉教授 高橋 則子

文化一四年三月、江戸・河原崎座上演歌舞伎『桜姫東文章』は清玄桜姫物ではあるが、当時江戸で起きた複数事件からの取材が先行研究で指摘されている。本発表では発端「江の島児ヶ淵の場」で、衆道関係にある所化自久と稚児白菊丸とが心中しようとし、身を投げた白菊丸に後れて自久は生き延びる話へと、児ヶ淵伝説を改変する点に注目する。白菊丸が転生した桜姫へ

の贖罪として、清玄（自久）は墮落を甘受する。この「心中に後れをとつた僧」の話は、万治二年刊古版地誌『鎌倉物語』や貞享二年刊『新編鎌倉志』等に載る児ヶ淵伝説には記されない。明和・安永期刊と思われる黒本『江島児淵』は児ヶ淵伝説を一素材とし、稚児が叶わぬ恋に悩み将来を悲観して投身自殺する箇所がある。それを憐れんだ僧が詠んだ狂歌「もろともに身を投げんとは思へども向かふの岩で頭危なし」は、立羽不角の俳諧紀行『紀行笠の蠅』（元禄一四年刊）に、江島の旅籠関係者が、観光案内で詠んだ狂歌として載ると既に指摘されている。その狂歌が『桜姫東文章』の「心中に後れた自久」の創造に影響を与えた可能性がある。この狂歌は他の南北作歌舞伎である文政三年一月上演『梅曆曙曾我』、同九年八月上演『曾我中村稚取込』の児ヶ淵の場でも引用されている。

この案内人の狂歌利用の背景には、当時の江戸一般庶民の間での江島弁財天開帳への参詣流行と、南北劇が世相風俗を反映させる傾向が強いことが関係していると思われる。





# 立教学院（池袋）

## 構内案内図



